

は過去最大の選手団を派遣し、大きな成功を収めた大会であったが、一方で世界全体でみると前後の大会と比べて参加選手は半分程度であり、特にヨーロッパ勢は開催地が遠距離であるのを理由に不参加が多くなった。結局ホッケーは前回大会の覇者インドと開催国アメリカ、そして日本のみ三チームしか出場せず、メダルは確定、焦点はその色であった。



ロスに向かう船上でのホッケー選手。前列左端が浜田、右から2人目が中村。(福澤研究センター蔵、平沼泰三氏寄贈)

日本の懸念はグラウンドで、普段土のグラウンドでプレーするのが常であった選手にとって、慣れない丈の長い芝でのプレーは大きなハンデイキヤップであった。迎えた本番、インドには前評判通りの力の差を見せつけられ1-11で敗れたが、アメリカを9-2で破り二位となつたのである。出場三チームとはいえ、無人の領域を開拓し、その基盤を築いたホッケー部の面々にとって、オリンピック出場、銀メダル獲得がどれほどの喜びを与えたかは想像に難くないだろう。

日本における各種の近代スポーツのうち壘球をルートとするものがしばしばあるが、ホッケーはその最たるものである。始まりは明治三十九(一九〇六年)、三田山上で宣教師W.T.グレーリー(William Thomas Grey)が講演で紹介し、さらに自らステイックを取り壘生にプレー方法を教え、

ド戦を迎えた。ロサンゼルスの雪辱でもあったが、当時最強のインドには0-9と歯が立たずグループ敗退となりメダルには届かなかつた。

柳は同大会を「どんな相手にも常に最大の力を出して戦うより外はなかつた。相手によって作戦を変えようなどという余裕はさらになかつた」と回顧している。上野もインドの実力に衝撃を受けつつも、その試合の分析をまとめて後輩を鼓舞した。それでも大会後上位チームと善戦したこと、五位相当の実力はあると目され、世界のトップに対しても一歩のところまで来ていたが、戦争によって再挑戦の機会は失われてしまった。

戦後日本ホッケーの国際舞台への復帰は他競技と比べて遅れ、一九六〇年のローマ五輪まで待たなければならなかつた。壘球部からのお出場もローマ(飯島健、岩橋邦雄)、一九六四年の東京(岩橋邦雄)が最後となっている。

第六回

慶應義塾のオリンピアンたち／ホッケー部

横山 寛

(慶應義塾福澤研究センター研究嘱託)

日本ホッケーのルート

一九三二年のロサンゼルス五輪ホッケーで日本が獲得した銀メダルは、团体競技として初めてのメダルであった。これには代表選手として三人の壘生・壘員が直接貢献したが、長い目で見れば壘球部の存在そのものが大きく貢献した結果と言つても言い過ぎではないのである。

日本における各種の近代スポーツのうち壘球をルートとするものがしばしばあるが、ホッケーはその最たるものである。始まりは明治三十九(一九〇六年)、三田山上で宣教師W.T.グレーリー(William Thomas Grey)が講演で紹介し、さらに自らステイックを取つて壘生にプレー方法を教え、

ホッケー倶楽部が発足した。翌年には横浜で外国人クラブY.C & A.Cと初めての試合を行つてゐる。しかし彼らの歩みはいがらの道だった。後発クラブのため綱町グラウンドを使ふ許可は得られず、石ころの多い空き地で練習せざるを得なかつたうえ、なかなか体育会入りも認められなかつたために自分たちすべての費用を賄わなければならなかつた。対戦相手も日本人のチームは他に存在しないため、もっぱら横浜と神戸の外国人クラブか壘OBのチームであつた。こうした状況が実に十五年あまり続いたのである。

大正八(一九一九年)年に体育会へ加入した壘球部は、自ら競技

の普及へ動いた。すなわち大正十一年に陸軍戸山学校へホッケーを紹介、同校にホッケー部が誕生する。翌年早稲田大学、明治大学などにもホッケー部が誕生し、大日本ホッケー協会の設立、第一回日本選手権の開催へと至つた。そして普及の波は早慶定期戦の開始、大正十四年の関東学生ホッケー連盟の設立及びリーグ戦の開幕へと続くのである。

こうして競技の基盤が整うことでの競技力も向上し、一九三二年、いよいよロサンゼルス五輪へ代表チームを派遣することになった。代表選手は十三人が派遣され、壘からも浅川増幸(主将)、浜田駿吉、中村英一の三人が選出された。選考では種々の事情から選出できない有力選手もいたが、浅川(大正十五年卒)も普段は会社員であり、反対を振り切つて参加したという。選手たちは船上で調整のトレーニングをしつつ、約二週間かけてロサンゼルスへ到着した。

ロサンゼルス五輪は日本にとって